

# 列挙・例示の書き表し方について

林 伸 一

列挙・例示の書き表し方については、国語の教科書や日本語表記の概説書などに付録的に示されてきたが、列挙・例示の書き表し方に焦点化した論文は少ない。列挙・例示の書き表し方は、Ⅰ) 文章の表現文型によるものとⅡ) 符号等によるものに大別される。具体例として主に『高等学校 国語表現』(以下「表現」と略、1982、大修館書店、原文は縦書き)および外国人のための初級日本語教材『おいでませ山口』(以下「おいでませ」と略、山口県日本語教育ネットワーク、原文は横書き)から採取する。その他の例に対しても…は省略したことを示し、下線は筆者によるものとする。

## Ⅰ. 文章の表現文型としての列挙・例示の例

### 1. ～たり～たり

- 例1-1) 手紙や通知が特定の相手を対象にして書かれたり、一定の日時や場所の範囲で書かれたりするのに対して、説明・記録・報告では、そういう制約はあまり強くない。(表現 p.48)
- 例1-2) 古いカレンダーや余り物の色紙でできているその雪は、黄色だったり赤だったり青かったりする。(表現 p.67-68)
- 例1-3) 昔の家にはみな縁側があったので、年寄りは縁側に座って、針仕事をしたり、孫のお守りをしたり、また庭に出入りしたりして、一日を過ごすことができた。(表現 p.94)

「たり」は、並列助詞または並立助詞と呼ばれ、動作や状態を並列して述べる場合に用いられる。本稿では、他の例も並列助詞という用語を用いる。

「～たり～たり」には、「寝たり起きたりです」(病状があまり思わしくない場合の表現)「上がったたり下がったりする」(気温や成績、株価など変動し、一定していない状態を表す)「行ったり来たり」(何度も往復する、あるいは落ち着かない状態を表す)などのように慣用句として用いられているものもある。列挙・例示の例というよりは、反対の意味の語を二つ並べて、その動作・状態が交互に行われる反復表現に分類される例と言えるだろう。慣用表現か否かは、その語順が固定的か交換可能かによる。

林 (1989) は「～たり～たり」の説明図として、次の図1～3を提案している。

- a : (おさけを)飲みます
- b : (料理を)たべます
- c : (歌を)歌います
- d : (ダンスを)踊ります
- e : (初めての人を)紹介します
- f : (人に)紹介してもらいます
- g : (お互いに)名刺交換します

三つ以上の任意の選択も可能  
代表的な動作のとりたて機能  
(例)食べたり飲んだり歌ったりします。

図1 「～たり～たりします」  
(アメンバー的とりたて機能)

プラス・マイナスの関係を表わす対照的な関係、肯定・否定の関係、状況・動作が一定しないことを表わすが、動作性よりも状態性のほうが強い。

- a : いつも暑いです。
- b : いつも寒いです。
- 例 : 暑かったり寒かったりです。

図3 「(～たり～たり)です」(波形的コントラスト機能)

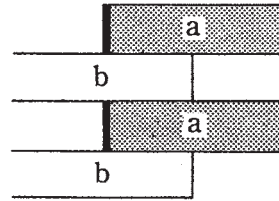
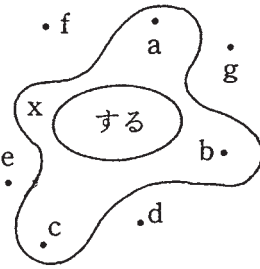


図2 「～たり～たりします」  
(反復的な動作a, b  
のサンドイッチ形式)

- a : 行きます
- b : 来ます
- 例 : 行ったり来たりします

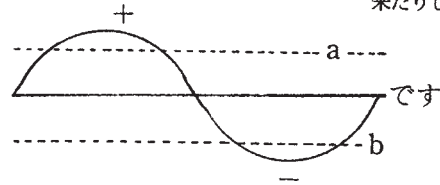


図1は、「食べたり飲んだり歌ったり」のようにa, b, c, d, e, f, g…の中から代表的な動作a, bまたはa, b, cを取り出し、列挙・例示する場合で、図2は、「行ったり来たり」のような反復的な動作を表す。図3は、「暑かったり寒かったり」のように相反する状態a, bがプラス・マイナス一定していない波形を示している状態を表している。

上記の図は、「～たり～たり」に限らず、他の列挙・例示にも該当すると思われるので、図1を任意の取立てのアメンバー形式、図2を反復のサンドイッチ形式、図3を対比的な波型形式としておきたい。

例1-1～3は、図1の任意の取立てのアメンバー形式の例と言えるであろう。

牧野 (1980) は、「～たり～たり」に関して次のように述べている。

さて『AやB』に対応する動詞・形容詞を接続するのが『たり』である。両者とも列挙に完結性がない。順序はここでも情報の流れの制約を受ける。例えば相手が推理小説を読むのが好きだということを知っている場合は相手は (Ba) のように答えて (Bb) のようには答えないだろう。

(88) A：「お暇な時には推理小説を読んだり、なさるんですか。」

Ba：「ええ、推理小説を読んだり、クラシック音楽を聞いたりします。」

Bb：??「クラシック音楽を聞いたり、推理小説を読んだりします。」

(Bb) がもし適格だとしたら、それは A が B の趣味について認識不足だということになる。

つまり、牧野 (1980) は、「～たり～たり」に関して対話する二者間の旧情報を優先して示し、次に新情報を加えるという順序性があることを主張している。「～たり～たり」のイメージは、任意の取り立てで、順序性はないと思われがちであるが、談話として見た場合に、上記のように文脈上順序性が発生する場合がある。

(88) A も「お暇な時にはどのようなことをなさるんですか」との開かれた質問 (open question) であれば、答えは任意の取立てのアメンバー形式 (図 2) の例となるであろう。

山口県日本語教育ネットワーク発行の『おいでませ山口 3』(2013) には、「動作等の並立 (Expressing Various Actions) として「～たり～たりする」を扱っていて、次のような例を示している。

例1-4) よく動物のビデオを見たり、絵をかいたりするんですよ。(p.42)

例1-5) ゆうべは、音楽を聞いたり、手紙を書いたりしました。(p.46)

例1-6) 先生に聞いたり、辞書で調べたりします。(p.46)

初級テキストの『おいでませ山口 3』には、「寝たり起きたり」「上がったたり下がったり」「行ったり来たり」「飛んだりはねたり」などの慣用句として用いられているものは、提示されていない。例1-4は「何が好きですか」、例1-6は「日本語がわかりません。どうしますか」という開かれた質問に対する任意の取立ての応答である。(図 1 の例)

「たり」には、副助詞的に用いて、同種の事柄の中から、ある動作・状態を例示して、他の場合を類推させる場合もある。『デジタル大辞泉』には「車にひかれたりしたらたいへんだ」という用例が示されている。

この用例は、無主格文であり、どんな場面で、誰が誰のことを心配しているのか示されていない。主格や場面を類推させ、言外に暗示する表現方法である。このように日本語が、あえて他の場合の列挙・例示を省略して、類推させ、暗示するところが「省略する言語文化」と言われる所以であろう。(詳しくは林2014参照)

## 2. ～とか～とか

- 例2-1) ある女性が、やせるために食事をとらず餓死したとか、またある女性が、美容食を母にとがめられて自殺したとかいうニュースがあった。(表現 p.75)
- 例2-2) 自分で調べなさいとか、実験してみなさいというのでは、相手をすぐ納得させることができないから、信用されないし、これでは根拠をあげたことにもならない。(表現 p.84)
- 例2-3) 感じたことを述べるためには「なんとなくおもしろかった。」とか「なんとなくつまらなかった。」などという「なんとなく」式の文章ではあまり意味がない。(表現 p.100)
- 例2-4) 二つの手紙を読んで、「誠実」とか「真情」とかいうものは、どんなものかおわかりになったことと思う。(表現 p.125)

「とか」は、並列助詞「と」と副助詞「か」の連語で、事物や動作・作用を例的に並列・列挙する場合に用いられる。『デジタル大辞泉』には「漱石とか鴎外とかといった文人」「見るとか見ないとか騒いでいる」などの用例が提示されている。

例2-1のように「～とか～とかいう」と二つ以上の例が示されることが多いが、実際には、例2-2のように「～とか～という」の形でも用いられる。

また、例2-2は、「自分で調べなさい」とか、「実験してみなさい」というように引用符を伴って用いられることもある。命令文という文レベルでの列挙・例示の場合である。例2-3は、引用符を伴って、感想を表す文レベルの列挙・例示の場合である。

例2-4も、引用符を用いた語句レベルの列挙・例示である。例示する語句や文に引用符を用いるか否かは、書き手の判断による。上記4例は、引用符の有無に関わらず、引用の意味合いを持っており、文や句をそのまま受けて、動作・作用・状態の内容を表す引用の「と」と副助詞「か」の連語とも考えられる。

## 3. ～か～か

- 例3-1) わたしにとって文章の理想というのはどういうものか、いま自分のいるところから見て、良い文章というのはどういうところにあるのか、その方向を考えてみると、三つあると思います。(表現 p.13)
- 例3-2) 何をつくるにしても、出来上がったものを点検して、どこかに不備はないか、よりよい仕上がりにするにはどうしたらよいかと、工夫をめぐらして、さらに手を入れ、みがきをかけて、いわゆる総仕上げをするのが普通である。(表現 p.138)

例3-3) …「愛すればこそ」はいったいだれが愛するのであろうか、「私」が「愛すればこそ」なのか、「彼女」がなのか、あるいは「世間一般人」なのか、要するに、主格をだれにしてよいかが明瞭ではないというのであります。  
(表現 p.139)

例3-1の「文章の理想というのはどういうものか」や「良い文章というのはどういうところにあるのか」は、問題提起の列挙・例示または内容の言い換え表現の例示と言えるだろう。

例3-2の「どこかに不備はないか」「よりよい仕上がりにするにはどうしたらよいか」は、点検項目を列挙・例示しているので、順序を入れ替えてもかまわない。

しかし、例3-3の「いったいだれが愛するのであろうか」は問題提起の部分で、それに続く「私」が愛すればこそ」なのか」と「彼女」がなのか、あるいは「世間一般人」なのか」の部分、考える選択肢を列挙・例示しており、要するに、主格をだれにしてよいかは解答が明瞭でないという形でまとめており、文脈上の順序性がある。考える選択肢「私」「彼女」「世間一般人」の順序は入れ替えても構わないが、問題提起⇒考える選択肢⇒まとめの流れと順序性は、変え難いであろう。ちなみに例3-3は、谷崎潤一郎の「含蓄について」からの引用である。

庵ら(2001:63)は、「～か～」を挙げた要素の中から一つを選択する「選択的列挙」の代表的な形式として「お飲物は、コーヒーか紅茶、どちらになさいますか」という選択疑問文を例にあげている。「AかBか」の形式で慣用句となるものには、「一か八かやってみる」「生きるか死ぬかの瀬戸際」「鬼が出るか蛇が出るか」などの例がある。

#### 4. ～や～

例4-1) 同じく太陽系の惑星で、太陽からの距離や、大きさも大差がない。

(表現 p.89)

例4-2) ここに言う縁とは、住まいの縁、すなわち縁側やぬれ縁のことである。

(表現 p.92)

例4-3) もし縁がなければ、開放的な日本の住まいでは、雨や直射日光が直接室内に入り込んできて、畳や障子、土壁などを傷めつけるであろう。(表現 p.96)

例4-4) しかし半面では、そのために、自分の周囲にある事物や人間に対する観察や知識をなおざりにしがちなマイナスもある。(表現 p.112)

「や」は、並列助詞で、名詞や名詞に準ずる語について、事物を並列・列挙する場

合に用いられる。また、「や」は、等位接続詞とも言われ、「と」のように列挙に完結性がない。牧野（1980）は、「魚や肉で、どっちが好き？」と言えないのは、「や」は、「と」のように列挙に完結性がないためであるとしている。

例4-1のように「太陽からの距離や、大きさ」と「や」のあとに「、」を付ける場合とそれ以下の例のように「、」を付けない場合があるが、後者のほうが一般的であると思われる。

例4-3のように「畳や障子、土壁など」と三者以上の列挙・例示の場合、「AやB、Cなど」とする場合と「AやBやCなど」とする場合があるが、前者が文章中で「、」を付ける場合であるのに対して、後者のほうが口語的で列挙する語句が多くなる場合である。ただし、一文中にあまり「や」を多用すると稚拙な感じがする。

例1-2)の「古いカレンダーや余り物の色紙でできている…」の例も任意の材料を「や」で結ぶ形で、順序性なく、例示している。

牧野（1980）は、「AやB」の型について、次の例を挙げている。

敬語がからむと、「と」と同じように、順序が固定することがある。(注1)

(83) (a) 先生や私などが研究員に任命されたようです。  
(b) ?私や先生などが研究員に任命されたようです。

「や」は列挙の標識ではあるが、「AやBやC」と言う時に「A」が一番意識の表面上に上がっている旧情報である点でも「と」の場合と同じである。

(84) A:「パーティーには誰が来た? 山田は来たんだろう。」  
Ba:「うん、山田や川口や山下が来た。」  
Bb: ?「うん、川口や山田や山下が来た。」  
Bc: ??「うん、川口や山下や山田が来た。」

「山田」は旧情報であるから、これを真先に言うのが自然で(Bb)(Bc)のようにあとで言うのは不自然である。このような旧から新への情報の流れは文構造を越えているばかりでなく、話し手・書き手の選択を越えている点でスタイル上の現象とは認めがたいのである。

牧野(1980)は、「AやB」の型で、慣用句として凍結した例もないとしている。ただし、森田(2010)は『日本語の慣用表現辞典』の中に「あれやこれやと～」を「事態における主観的な判断」の中の「現状判断」を表す慣用的な言い回しとしている。

また、森田(2010)は、「～するや否や」を「生活と時の経過」の分類項目の中で取り上げ、「間髪を容れず～／～するや否や／時を移さず～」の小項目を立てて、次

のように解説している。

「～するや否や」の「否」は、打消の意味で、「～するかしないかの内に」の意。「その選手はゴールするや否や、その場に倒れ込んだ」のように、ある事柄の成立と同時に別の事態が生ずること。また、意志的な行為に直ちに取り掛かること。「警官の姿を見るや否や、あわてて路地裏へと走り出した」。

さらに森田（2010）は、「～や否や」を「時の側面から捉えた行為」の分類項目の中でも取り上げ、「間髪を容れず～」との関連で、次のように解説している。

「××するや否や」も時間的に間をおかぬ点では同じだが、こちらは「ピカッと光るや否やゴロゴロと雷鳴が轟いた」のように、同一主体による行為や現象に用いるのが普通である。

森田（2010）は同じ「時の側面から捉えた行為」の分類項目の中で「言い切らぬうちに～／言うや否や」という小項目を立てて、説明している。前者が「話し手がその事柄を最後まで全部言い終わらない前に～」であるのに対して、「～や否や」は、「ある状況が成り立つと直ちに間を置かず…」であるとしている。

さらに『デジタル大辞泉』には、「～やいなや」の形で、問いかけの「～かどうか。どうだろうか」の意を表す場合があるとして、「頼みの雨は降るやいなや」が用例として挙げられる。

## 5. ～と～と～

例5-1) …小学校へ通う孫娘の押し花の材料にと考え、瑠璃色と赤と小豆色の朝顔を一輪ずつ摘んで、それを上向けに持って段になった坂道を降りていくと、一匹の虻が私の顔の回りをうるさく飛び回った。（表現 p.106）

例5-2) この文章を大きく二つに分け、その前半と後半との関係を考えてみよ。（表現 p.113）

例5-3) …それが日本文の特徴であって、曖昧と言えば曖昧だけれども、具体的である反面に一般性を含み、ある特定な物事に関して言われた言葉がそのまま格言やことわざのような広さと重みと深みを持つ…（表現 p.139-140）

「～と～と～」の「と」は、並列助詞として、いくつかの事柄を列挙する場合に用

いられ、「君とぼくとの仲」などの用法が典型例である。

庵ら（2001）は、「～と～」を「全部列挙」の最も一般的形式として「名詞と名詞」を並べて挙げる場合以外には使わないとしている。上記三例も名詞の列挙・例示である。

「～と～」の形は、「～や～」に比べてセット・イメージが強く、例5-2の「前半と後半」あるいは「男と女」や「表と裏」のように「AとB」で完結していて他に列挙・例示がない閉じたイメージである。

牧野（1980）は、「AとB」で完結している関係について次のように述べている。

「AとB」の構文には「酒と肴」、「月とスッポン」、「バカとはさみ」、「watch and chain」、「bread and butter」、「young and old」のようにA、Bの語順が完全に凍結している慣用句がある。このような場合は無論、話し手・書き手に語順の選択の余地はないが、非慣用的な「AとB」構文でも意識の流れと敬語の原理でその語順は決まってくるのであって、スタイルとしての選択の余地はきわめて少ないと言わなければならない。

「AとB」の「と」は、日本語では「並列助詞」だが、英文法では「A and B」の「and」は、「等位接続詞」と呼ばれる。牧野（1980）は、英語でAとBで単一観念（単数扱い）を表したりする場合を慣用句としている。上記の例の“watch and chain”は「鎖のついた時計」「bread and butter」は「バターを塗ったパン」「young and old」は「老いも若きも／若い者も年取った者も／老若男女」となる。その他に単一観念の慣用句として ham and eggs（卵をそえたハム）、brandy and soda（ソーダ水で割ったブランデー）、strawberries and cream（クリームをかけたいちご）などがある。

英語の「and」は、「等位接続詞」と言いながら、上記の例は「AとB」が対等の関係で結ばれている訳ではない。日本語においても「酒と肴」は「酒」がメインで「肴」の方は、その付属物で料理屋などでは「突き出し」「お通し」「おつまみ」とも言われる。もともとは「酒（さか） 菜（な）」の意で、「魚」でなくても「あり合わせの物」でもよい。さらに「肴」は、食べ物でなくても「酒席に興を添える歌や踊り、話題」などでもよい。「同僚の噂話を肴にして一杯やる」場合もある。「酒」にも「日本酒」「ビール」「ワイン」「ウイスキー」と様々な種類があり、「酒」はそれらの上位語だが、「肴」にも様々なバリエーションがあり、上位語となる。語順は「酒と肴」で固定している。

「月とスッポン」も、二つのものの違いがはなはだしい場合に、格差がありすぎて比べものにならない様子を表す。「大物女優とあの新人では、月とスッポンだ」「私と



あなたでは、月とスッポンです」「二人の実力の差は、月とスッポンほど大きい」などと用いる。「月」が桁外れに上位で、「スッポン」は最下位にあることから、その語順も「月とスッポン」で固定している。「スッポン（鼈）」は、「かわがめ」「どろがめ」とも言われ、食用、薬用にするカメの一種であるが、スッポン料理を英語で言うところでは“turtle dishes”となる。「月とスッポン」の「スッポン」は最下位にあるはずだが、「スッポン料理」となると一人あたり5000円から一万円くらいはする高級料理となる。

例5-1の「瑠璃色と赤と小豆色」の場合、非慣用的な「AとBとC」の関係であり、語の順序性は固定的とは言えないであろう。「AとBとC」の他に「DとE…」とさらに列挙・例示の可能性はあるが、「～や～」ほど開いたイメージではない。

並列助詞の「と」「や」「か」は、同じような意味を持つ名詞を並べて示すときに用いる。庵ら（2000）は、次のような例を挙げている。

- |   |
|---|
| <p>(1) 昨夜は<u>パスタ</u>と<u>ピザ</u>を食べた。</p> <p>(2) 昨夜はみんなで<u>パスタ</u>や<u>ピザ</u>を食べた。</p> <p>(3) 彼は昨夜<u>パスタ</u>か<u>ピザ</u>を食べたはずだ。</p> |
|---|

上記 (1)～(3) は、いずれも「パスタ」と「ピザ」という「料理」の下位語を並べて挙げている。異なるのは並列・例示されている名詞の捉え方である。

「と」は、該当するものすべてを列挙するときに用いる。上記の(1)では、「昨夜食べた」のが「パスタ」と「ピザ」だけあって、他には食べなかったという「全部列挙」の意味合いになる。「パスタ」と「ピザ」だけで閉じたイメージとなる。

「や」は、挙げられているものの他に該当するものがある場合に用いる。庵ら（2001）は、一部の例だけを挙げる「部分列挙」に用いるとしている。(2)では、「パスタ」と「ピザ」が「昨夜食べた」もののうちの代表的なものであるが、それで全てではなく、他にも何か食べたものがあることを暗示していて、開いたイメージである。

「か」は、列挙されている例示の中から該当するものを選択する「選択的列挙」の場合に用いられる。上記の(3)では、「パスタ」か「ピザ」のどちらか一方を「昨夜彼が食べた」ことを意味している。(庵、2001参照)

つまり、「AとB」は、「全部列挙」で、「AやB」は「部分列挙」、「AかB」は「選択的列挙」となる。さらに「AとBとC」と三者以上になっても「と」で結ばれていれば「全部列挙」であり、同じく「AやBやC」は「部分列挙」となり、「AかBかC」は三肢択一の「選択的列挙」となる。

## 6. ～も～も

例6-1) カードの本文は多種多様であるが、本や雑誌からの要約の場合も、自分の考えをカード化する場合も、必ず逆ピラミッド型の文にしなければならない。(表現 p.25)

例6-2) メモの取り方には、ほんの見出しや項目程度を書きつけておく場合もあれば、きちんと文章化してまとめたものもある。(表現 p.24)

例6-3) 作者は「故郷を思ふ」と言っているだけで、「寂しい」とも「恋しい」とも「うら悲しい」とも、そういう文字を一つも使っておりません。(表現 p.142)

係助詞「も」は、同類の事柄を並列・列挙する場合に用いる。

例6-1は、「AもBも」の文型であるが、ここでは「～の場合も、～する場合も」といづれも「場合」という名詞が来て、場合分けを示している。例6-2の方は、下線の「書きつけておく場合も」と「きちんと文章化してまとめたもの」の部分に着目すれば、例6-1の「AもBも」の文型としてみることもできる。しかし、「～もあれば、～もある」の方に着目すると次項の「～もあり、～もある」の文型に近くなる。意味的に見れば、「～もあれば、～もある」と「～もあり、～もある」は同類であり、言い換え可能である。つまり、「Aもあり、Bもある」の変形した表現文型として、「Aもあれば、Bもある」の形がバリエーションとしてあると考えられる。

例6-3は、「A」とも「B」とも「C」とも…の形で、引用の格助詞「と」と係助詞「も」の連語となっている。「寂しい」「恋しい」「うら悲しい」と列挙・例示し、「使っておりません」と打ち消している。ぞんざいな表現では、例6-3を<「寂しい」も「恋しい」も「うら悲しい」もない>と言い換えることができる。

その他にも「AもBも」の文型には、「草も木も枯れる」「右も左もわからない」など成句的、慣用的な用法がある。石橋(2007)は、次のような例を採取している。

例6-4) 日本に着いたばかりで、西も東も分かりません。

例6-5) 若い時はあれもこれも欲しい年代だ。

例6-6) どれもこれもみんな話がだめになった。

例6-7) 彼の人生は花も実もある人生だった。

例6-8) 故郷は山も川もすっかり変わってしまった。

上記の5例は、いずれも成句的、慣用的な用法で語順を入れ替えて用いることは、特別な場合を除いてはないものと思われる。

例6-4は「西も東も分からない」で「その土地に初めて来て無案内であること」を表現している。さらに意味が拡張して「物事を理解する力が全くない。また、どうしたらよいかわからない」という場合にも用いられ、「西も東も分からない子供」などと表現することもある。「東西南北」といった熟語になると「東⇒西⇒南⇒北」という順序性が固定しているのに、何故か「東も西も分からない」とは言わない。

慣用表現の「右も左もわからない」も同様である。「上下左右」「前後左右」といった熟語になると「上⇒下⇒左⇒右」「前⇒後⇒左⇒右」という順序性が固定しているのに、何故か「左も右もわからない」とは言わない。音読みの漢字熟語と訓読みの成句の差異であろうか。「西（にし：2拍）も東（ひがし：3拍）も」と「右（みぎ：2拍）も左（ひだり：3拍）も」は、ともに2拍語を先に出し、3拍語を後回しにするという語の言いやすさとリズム感が関係しているという説がある。

例6-5の「あれもこれも」と例6-6の「どれもこれも」は「みんな」「全部」「すべて」の意味で用いられる。「それもこれも」も用いられるが、成句とまでは言えそうもない。「AもBも」の形として認識されにくいのが、「何もかも」「誰も彼も」などの連語がある。「誰も彼も」は、古くは「たれもかも」で、「あの人もこの人も」「すべてのひとが」の意である。「だれもかも」「だれもかれも」の言い方があり、さらに一語化して「誰彼（だれかれ）」という不定称の人代名詞となり、特定しない複数の人（あの人、この人）という場合に「誰彼無しに」などと連語・慣用句として用いられている。

例6-7の「花も実もある」も慣用句であり、「外観も内容もりっぱである。また、道理にもかかって、人情がこもっている」という意味で用いられ、「花も実もある粋な計らい」「花も実もある人生」などと成句となっていて、語順は入れ替えられない。

例6-8の「故郷は山も川もすっかり変わってしまった」の「山も川も」は、必ずしも成句・慣用句とは言えないが、「山と川」で自然を代表し、「山も川も」で「自然はすべて」という意味であれば成句・慣用句に近い。「山と川」「山や川」などと共に「山も川も」の「山⇒川」という順序性も固定的である。杜甫の「春望」にある「国破れて山河あり」（国は戦乱によってぼろぼろに破壊されつくしたが、山や川はもとの姿のまま存在している）も「山⇒河」という順序性は固定的である。

これは、「草も木も枯れる」も同様で、「植物はみな枯れる」の意で用いられている。その他「草木も靡く（盛んな威勢に、すべてのものがなびき従う）」「草木も眠る（夜がすっかり更けて、すべてのものが寝静まる）」など「すべてのもの」意で用いられ、「草も木も」が一語化して「草木も」となり、「草⇒木」という順序性も固定的である。「草木」は「くさき」と訓読みにしても「そうもく」と音読みにしても語順は同じである。

『Weblio 類語辞典』には、次のようにまとめられている。

表1. どれもこれも・あれもこれも・それもこれも（表題と下線は筆者）

意義素	類語
多数のものが一様に同じ状況にあるさま	<u>どれもこれも・あれもこれも・あっちもこっち・こっちもそっちも・どこもかしこも</u> ・揃って・一様に・同じく
数あるうちの全てを示す表現	残らず・ガラッと・全部・みんなまとめて・あるだけ・あるもの全部・皆・みんな・ <u>どれもこれも・あれもこれも・あっちもこっちも・こっちもそっちも・それもこれも</u> ・みんな・ありっただけ・ことごとく・全てにおいて・全てにわたって

さらに「AもBも」の文型には、「泣いても笑ってもあと～日」のような慣用表現がある。『デジタル大辞泉』は、「泣いても笑っても」を「どのようにしても」と語義を示し、「物事が最後の段階まできていること」の比喻表現であるとしている。用例としては、「泣いても笑っても卒業まであと一週間だ」が挙げられている。

「AもBも」の形で「痛くも痒くもない」という慣用句もある。「少しも苦痛を感じない。全く影響がない」意で、「何と言われようと痛くも痒くもない」などと使う。

その他に「AもBも」の形の慣用表現には「酸いも甘いも噛み分ける」（人生経験が豊かで人の機微や世間の事情によく通じている。酸いも甘いも知っている）がある。『デジタル大辞泉』は「酸いも甘いも嗅ぎ分ける」とするのは誤りとしていて、語順が固定しているだけでなく、表現自体も固定している。「～たり～たり」の項で示した図3の対比的な波形の例を示している。

さらに「AもBも」の形の慣用的な言い回しとしては「生かすも殺すも思いのまま」「手も足も出ない」「猫も杓子も」などがある。「酸い（すい：2拍）も甘い（あまい：3拍）も」と「猫（ねこ：2拍）も杓子（しゃくし：3拍）も」は、ともに「2拍語も3拍語も」の語順になっている。

## 7. ～もあり、～もある

例7-1) 相手が <u>一人のこともあり</u> 、数人あるいは不特定多数を相手に話す場合もある。相手の人数によって話し方もおのずから異なる。(表現 p.7)
例7-2) 結婚披露宴でのテーブル・スピーチや一人しゃべりの <u>演説もあれば</u> 、相手のある対談、座談、討論もあり、 <u>司会という役割の話し方もある</u> 。(表現 p.7)
例7-3) 対談や座談でも <u>その場に居合わせた者だけ</u> ですむことも、 <u>不特定の第三者に聞かせる場合もある</u> 。(表現 p.7)

上記の三例は、荒垣秀雄氏の「話し上手」という文章中の同じ段落のひと続きの文

例である。要は「話の多様性」を示すために、様々な場合があることを列挙・例示している。例7-1は、「Aもあり、Bもある」の文型で表現している。例7-2の場合は、「AやBもあれば、Cもあり、Dもある」と四つの場合分けを示している。

例7-3では、「Aもあり、Bもある」の前件の「あり」が省略されて「Aも、Bもある」の形になっている。荒垣氏の「話し上手」という文章では、さらに前件さえも省略されて「ラジオやテレビで、厳格に限られた時間内に話す話し方もある」とあり得る場合を追加している。例7-3は、「AもBも」に着目すれば、前項の例となる。

## 8. ～であり、～である

例8-1) 原則として、話は人柄で聞かせるものであり、内容で聞かせるものである。

(表現 p.10)

例8-2) しかしそこまでつきつめないと気がすまないのは、物事を徹底せずにはいられない追求精神であり、実証精神である。(表現 p.108)

例8-3) そういう点で、科学的な記録などとは違い、あくまで個人的な観察であり、生活記録となっているのだ。(表現 p.109)

例8-1は、前項と同じ荒垣秀雄氏の「話し上手」という文章中の結論部分に出てくる文章である。前項の例は、書き出しの部分で、様々な話の場合分けをしておいて、起承転結といった具合に文章を展開し、最後に内容を締めくくる方向で、断定的な「話は人柄で聞かせるものであり、内容で聞かせるものである」としている。

つまり、はじめに「～もあり、～もある」と場合分けしておいて、最後は「～であり、～である」と断定的に締めくくっている。5ページにわたる文章中の出現部分による影響と内容の展開方法による影響が考えられる。例8-2と例8-3は、共に吉田精一氏の「随筆の名作」という9ページの文章中の8ページ目と9ページ目の最後の方の文章である。

例8-2は「Aであり、Bである」という文型であるが、例8-3の方は、その変形で「Aであり、Bとなっている」という表現になっている。「個人的な観察であり、生活記録となっている」を「個人的な観察であり、生活記録である」と書き換えてもかまわないであろう。「ある」も「なる」も、ともに自動詞であるという共通点もある。

上記三例とも、「～たり～たり」の項で示した図1の任意の取り立てのAメーバー形式の例に類すると思われるが、「～であり、～である」という文型の方が断定的で閉じたイメージである。本項に対して前項の「～もあり、～もある」の方が開いたイメージである。

## 9. ～し～

例9-1) 自分で調べなさいとか、実験してみなさいというのでは、相手をすぐ納得させることができないから、信用されないし、これでは根拠をあげたことにもならない。(表現 p.84)

例9-2) もちろん因数分解ができるわけでもないし、英語も知らない。(表現 p.78)

例9-3) でも、私たちのできない、いろいろなことができるし、さまざまなことを知っている。(表現 p.78)

「～し～」は活用語の終止形につく接続助詞で、前に述べる事柄が、後に述べる事柄と並列的、対比的な関係であることを表すとされている。上記の三例は、並列的な関係を表している。

例9-1は、例2-2と同じ例文であり、前件の「～とか～(とか)」にあたる列挙・例示の表現と後件の「信用されないし、これでは根拠をあげたことにもならない」という否定的判断の並列的例示の例が同一文中にある。

例9-2も同様に否定的判断の並列的例示の例である。いつも否定的判断の並列的例示とは限らず、例9-3のように肯定的な判断の並列的例示にも用いられる。

前に述べる事柄が、後に述べる事柄と対比的な関係であることを表す例は、「成績はよくもないし、悪くもないしといったところだ」(『デジタル大辞泉』)がある。

また、「～し～」は、前に挙げた事柄を原因・理由として、次に述べる事柄に続ける場合にも用いられる。山口県日本語教育ネットワークの『おいでませ山口3』第3課には、次のような文例が示されている。

例9-4) わたしのアパートは駅から遠いし、きれいじゃないし、引っ越したいです。  
(p.19)

例9-5) バスは高いし、不便なので、あまり乗りません。(p.19)

例9-6) バスは高いし、不便だし、あまり乗りません。(p.19)

例9-7) バスは高いし、不便だし… (p.19)

例9-4と例9-6は「～し～し」の形で「理由を列挙する」機能を果たしている。

例9-5、例9-6、例9-7は「よくバスに乗りますか」という問いに対する応答のバリエーションを示している。例9-7は、前件のみを述べて、後件を省略して言わない例である。接続助詞というより、終助詞的用法で、事実・条件・理由を言いさし、結論を言外に

暗示する表現方法である。このように日本語が、あえて結論を省略して明示せず、暗示するところが「省略する言語文化」と言われる所以である。(詳しくは林2014参照)

『デジタル大辞泉』や『おいでませ山口4』に次のような用例が示されている。

例9-8) 旅行はしたいけれども、暇はないし… (デジタル大辞泉)

例9-9) せっかく出場させてもエラーはするし… (デジタル大辞泉)

例9-10) 体のためには吸わないほうがいいんじゃないかしら。その上、マナーの悪い人も多いし… (おいでませ山口4、第7課)

上記三例は、ともに言いさし文で、文末まで言い切らずに省略されている。

例9-8は、「旅行はしたいけれども、暇はないしお金もないから旅行には行けない」というような後半部分が省略されていると考えられる。

例9-9の「せっかく出場させてもエラーはするし…」を中国人留学生に示して、どんな場面か、想像してもらったところ「サッカーの試合」との答えが帰ってきた。日本人であれば「サッカーは、ミスキャッチ、ミスキックだね。野球は取り損なうと、エラー、暴投もエラー」となる。スポーツ文化の違いが背景にあると言える。

例9-9の例文は、誰が誰を何の試合に出場させたのか示しておらず、日本事情を知らない外国人には理解するのが困難な略題文であり、言いさし文である。

例9-10の「体のためには吸わないほうがいいんじゃないかしら。その上、マナーの悪い人も多いし…」も略題文で、誰が誰に言っているのか不明のはずだが、省略されている主題は「タバコは」で、自問の気分で問いかける終助詞「かしら」は、女性が使うことが多いことから、発話者は女性であることが想像できる。その上、「マナーが悪い」の内容は、「ポイ捨て」か「禁煙席での喫煙」で「…」と省略されている部分は「周りの人も迷惑する」あたりが入るだろうと「省略する言語文化」の日本人には推測できる。そもそもタバコを吸わない外国人には、理解し難いかもしれない。

「～し～し」の形で慣用句となるものとしては、「痛し痒し」がある。もともと虫に刺されて「かけば痛いし、かかないと痒い」ところから、意味拡張して「二つの方法のどちらをとっても具合が悪く、どうしたらよいか迷う」場合やまた、「具合の良い面もあれば悪い面もあって困る」場合に用いる。逆に「痒し痛し」とは言わない。

## 10. ～て～

山口県日本語教育ネットワークの『おいでませ山口2』(2009)第6課に、次のような文例が示されている。

例10-1) 軽くて はきやすいですよ。(p.41)

例10-2) この教科書は絵が多くて、わかりやすいです。(p.42)

例10-3) この本は字が小さくて、読みにくいです。(p.42)

上記の例10-1は、靴についての説明で「軽い」という特徴と「履きやすい」という特徴を兼ね備えていることを表現し、さらに「安くて軽くてはきやすい」のように特徴を追加して列挙・例示することもできる。

次の例10-2も、教科書についての説明で、「絵が多い」という特徴と「わかりやすい」という特徴を兼ね備えているとも解釈できるが、「絵が多いから、わかりやすい」とも解釈できる。つまり、文章による説明よりも絵や図による説明の方が理解しやすいという「見える化」の例とも言える。例10-3も同様に解釈すると「字が小さい」ために「読みにくい」と解釈すると特徴を列挙・例示する機能としては弱い例となる。

実際の会話では「～て、～て…」と次々に列挙・例示する場合がある。また「元気で真面目でよく働く」のように、ナ形容詞の列挙・例示の場合もあるし、「優しくして親切で積極的な人」のように、イ形容詞とナ形容詞の混在する列挙・例示の場合もある。

牧野（1980）は、「～て」の例として、次の例をあげて論じている。

問題は むずかしくて／むずかしく、量も多かった。

(The problems were difficult and many.)

共通の主語（問題）の性格を並列しているのので、その順序を逆にしてもかまわない。ただ、最初に立つ形容詞が名詞の主な属性として強調されるから、順序の移動は全く自由なわけではない。又、ここでも情報の流れの原則がはたらいて、

(86) A:「問題はむずかしかった？」

Ba:「うん、むずかしくて量も多かった。」

Bb: ???「うん、量も多くて、むずかしかった。」

のように、どれか一方に語順が固定することもある。

「問題は むずかしくて／むずかしく、量も多かった」に関して、牧野（1980）は、共通の主語が「問題」であるとして、「問題」の性格を並列していると説明している。

ただし、厳密に言えば「問題の内容は むずかしくて／むずかしく、その問題の量も多かった。」ということで、「共通の主語」を「問題」としていること自体が「問題」なのである。さらに厳密に言うならば、「主語」というと「主題 (topic)」のこと



なのか、「主格 (subject)」のことなのか不明である。この下線部を補充した例文の場合、「主題 (topic)」は「問題の内容」と「問題の量」であって、異なる「主題 (topic)」が同一文の中にある重文になっている。

単に「問題はどうだった？」という「開かれた質問 (open question)」であれば、「うん、量も多くて、むずかしかった」が正用となると思うが、補足的に言うとしたら、「うん、問題の量も多くて、問題の内容もむずかしかった」となるであろう。

実際場面では、「問題の内容がむずかしかったために、個々の問題を解くのに時間がかかり、制限時間内に全問解答することができなかったことから、結果的に問題の量が多かったと感じた」という場合が多いのではないかと思われる。そう考えると「問題がむずかしい」⇒「量も多い」という順序性が自然な流れとなる。逆に「問題がやさしければ、その量が多くても全問回答できた」ということもあるだろう。

牧野 (1980) は、「～て」の慣用句的な用法として、次の例をあげて論じている。

丁度、「A と B」に慣用句があるように、「て」にも次のように凍結した慣用句がある。

(87) (a) ほくはアフリカに行きたくてたまらない。

(a)\* ほくはたまらなくてアフリカに行きたい。

(b) あの男はおそろしくて仕方がなかった。

(b)\* 仕方がなくて、あの男がおそろしかった。

上記の「(a)\* ほくはたまらなくてアフリカに行きたい」は非文とされているが、「て」をはずして「ほくはたまらなくアフリカに行きたい」のように「たまらなく」と副詞的に用いれば、正用となる。ただし、「(b)\* 仕方がなくて、あの男がおそろしかった」の方は、「て」をはずして「仕方がなく、あの男がおそろしかった」としても非文である。

## 11. ～なり～なり

庵ら (2001) は、「～なり～なり」を挙げた要素の中から一つを選択する「選択的列挙」の形式の一つとしている。例11-1は馬淵ら (1982) 『高等学校 国語表現』の中の例であるが、例11-2、11-3、11-4は、庵ら (2001) の提示した例である。

例11-1) 論証とは、ある判断なり主張なり提言なり仮定なりの正しさ、真実性を根拠をあげて証明することである。(表現 p.84)

例11-2) 参考書が必要なら買うなり借りるなりして用意してください。

例11-3) 日曜日は図書館が閉まっているので、学生は自分の部屋なり大学会館なりで勉強しなければならない。

例11-4) 夏休みになったら旅行に行くなり田舎に帰るなりしてリフレッシュしたい。

庵ら (2001) は、「～なり～なり」は、文末に勧め、依頼、義務、希望などのモダリティ表現がくることが多いとしている。また、庵ら (2001) は「～なり～なり」をすでに行ったことなど確定した出来事には使えないとして、次の例11-5に×印を付けている。

例11-5) ×参考書が必要だったので買うなり借りるなりして用意した。

例11-6) 参考書が必要な学生たちは買うなり借りるなりして用意した。

例11-7) 学生たちは参考書が必要だったので買うなり借りるなりして用意した。

ただし庵ら (2001) は、複数の主体や対象が存在する場合には使うことができるとして例11-6を正用としている。その修飾関係と語順を変えて、例11-7としても正用と言えるであろう。そうすると例11-5を誤用 (×印) としたのは、単に略題文だったからというだけで、後件の「～なり～なりして用意した」と過去形になっている部分の制約条件とは言えないであろう。こういった正誤判断の問題は、一文のみを取り出して、○か×か判定することによる誤りと言えるだろう。

例11-5の例文は、略題文だが、その前後関係 (文脈) が示されていないので、仮に補ってみると「学生たちは試験を前にあせった。参考書が必要だったので買うなり借りるなりして用意した」という場合が考えられる。

三上 (1970) は、日本語の主題の省略について「主題“何々ハ”は次々の文まで勢力を及ぼすから、第2文以下が略題になることがある」として、「鯨はケモノだ。魚ではない」を例に挙げている。例11-5を誤用 (×印) としたのは、単に略題文だったからだとする、三上の例文「魚ではない」にも×印がつくことになる。

省略されている主題は「私は」であることが多いため、例11-5の例文を単独で判断し、×印がついたのかもしれない。しかし、仮に主題が第一人称単数の「私は」であったとしても、参考書が単数とは限らず、「いろいろな参考書が必要だったので買うなり借りるなりして用意した」の意だったとしたら許容または正用となる。

もともと「なり」は文語の断定の助動詞「なり」から転じたもので、近世以降、助詞として用いられたという経緯がある。しかし、「～なり～なり」となると、庵ら (2001) は、確定した出来事には使えないとしている。

「参考書が必要だったので買ったなり借りたなりして用意した」とすれば問題ないであろうか。そこで「～なり～なり」と「～たり～たり」の異同を検討する必要がある。

岡本・氏原（2012）は、次のような「～なり～なり」と「～たり～たり」の例文を示し、a、bどちらが正しいかと問うている。

- a. 就職するなり大学院に進むなり、早く決めたほうがいいよ。
- b. 就職したり大学院に進んだり、早く決めたほうがいいよ。

岡本・氏原（2012）は、「AなりBなり」について「AでもBでも、どれでも（かまわない）」という意味で、「AたりBたり」の方は「一つではなく、A（すること）やB（すること）などいろいろ」という意味であると外国人学習者向けに説明している。

岡本・氏原（2012）は、上記のaを正用として、「AなりBなり」について相手の行動を促すときによく使い、「AでもBでも、それに似たべつのものでいいから、とにかく何か選んで、」という意味であるとしている。

前掲の例11-1の例は「論証とは…」と語を定義する文で、必ずしも選択する例に該当するとは言えないであろうが、その他の例11-2、11-3、11-4では、当てはまる。

また、岡本・氏原（2012）は、「AなりBなり」は「過去の出来事には使えない」とし、それとは対比的に「AたりBたり」は「過去の出来事にも使える」としている。次の例文を対比的に示して、×と○を付けている。

- ×午後はずっと雨でしたが、ホテルで昼寝をするなりお茶を飲むなりしていました。
- 午後はずっと雨でしたが、ホテルで昼寝をしたりお茶を飲んだりしていました。

これも、庵ら（2001）が例11-5に×印を付けているのと同様のケースである。「ホテルで昼寝をするなりお茶を飲むなりしていました」とする動作主が示されていない略題文であり、この一文だけでは単数の主体「私は」が省略されているものと見なされてしまう。前後関係が示されておらず、この一文のみを取り出して誤用と判断するには問題がある。

「午後はずっと雨でしたが、選手たちはホテルで昼寝をするなりお茶を飲むなりしていました」と複数の動作主体を補えば、「選手たちが思い思いの判断で行動していた」という意味になり、許容または正用となるであろう。

また、岡本・氏原（2012）は、次の2文を示して、二者択一で正用を求めている。

- a. 昼間から家でゲームばかりしてないで、勉強するなり体動かすなりしたらどう？
- b. 昼間から家でゲームばかりしてないで、勉強したり体動かしたりしたらどう？

岡本・氏原（2012）は、上記 a を正解としているのだが、一方の b は誤りとは言えないであろう。「A たり B たり」は「一つではなく、A（すること）や B（すること）などいろいろ」という意味であると説明しているが、相手の行動を促すときに用いてはならないなどという制約条件を示している訳ではない。

池松・奥田（1997）は、「薬は大なり小なり副作用がある」「欠席する場合は、電話なりなんなりで連絡してください」の例を挙げている。これらは語順が固定されて用いられる慣用句的な用法である。

庵ら（2001）は、並列助詞とその複合形式を次の表 2 のように三分類している。

表 2. 並列助詞およびその複合形式の三分類

全部列挙	～と～
部分列挙	～や～(など)、～とか～とか、～やら～やら、～だの～だの、 ～といい～といい、～といわず～といわず、～であれ～であれ、 ～にしても～にしても、～にせよ～にせよ、～にしろ～にしろ、 ～でも～でも
選択的列挙	～か～(か)、～なり～なり

庵ら（2001）は、部分列挙の「～といい～といい、～といわず～といわず、～であれ～であれ、～にしても～にしても、～にせよ～にせよ、～にしろ～にしろ、～でも～でも」という形式は、「どの例をとってみてもその種類に属するものは」という仮定的なニュアンスを含んでいるとしている。表 2 には含まれていないが、次に示す「～であろうと、～であろうと」「～にしても、～にしても」も仮定的なニュアンスを含んでいると言えるであろう。

## 12. ～であろうと、～であろうと

例 12-1) …虻であろうと、蜂であろうと、どうでもよいと思われるかもしれない。

(表現 p.108)

例 12-2) 大人であろうと、子供であろうと、みんなこの番組が好きです。

(Whether an adult or a kid, everybody likes this programme.)

<https://chokochoko.wordpress.com/grammar-notebook/dearouto/>

例 12-3) 『夢があろうとなかろうと、楽しく生きてる奴が最強』(書名)

例 12-1) は、馬淵ら（1982）『高等学校 国語表現』の中の例である。「虻であろう

と、蜂であろうと」は、仮定的なニュアンスを含んでいて順序性の制約はないため入れ替えてもかまわない。(注2)

例12-2) は、インターネット上の「世界1番ジャパニーズラーニングマガジン・チョコチョコ!」から採取した例文で「大人であろうと、子供であろうと」は、「子供であろうと大人であろうと」に置き換えることができる。

例12-3) は高橋歩著(2013)『夢があろうとなかろうと、楽しく生きてる奴が最強』という本のタイトルである。「～があろうとなかろうと」は成句として一塊で用いられ、「～がなかろうとあろうと」と入れ替えることはできない。「～たり～たり」の項で示した慣用表現の対比的な波形(図3)に類すると思われる。

### 13. ～にしても、～にしても

例13-1) ただこの朝顔にしても、虻にしても、はっきりした作者の主観に裏打ちされている。(表現 p.109)

例13-2) 明日出かけるにしても家にいるにしても部屋は掃除しなさい。

例13-3) 髪は切るにしても切らないにしてもシャンプーはしたほうがいい。

例13-1)の例は、馬淵ほか(1982)『高等学校 国語表現』からの例であるが、任意の代表例「AにしてもBにしても」を取り出して、列挙していると言える。

例13-2)と例13-3)は、石橋(2007)の『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』から採ったもので、日本語能力試験の2級レベルという表示が付けられている。例13-2)の「出かけるにしても家にいるにしても」は「出かけるにしても出かけないにしても」と言い換えることもでき、実質上、例13-3)の「(肯定形)にしても(否定形)にしても」の文型に類すると見なしていいであろう。

例13-2)の「出かけるにしても家にいるにしても」は「家にいるにしても出かけるにしても」と順序を入れ替えてもかまわないが、例13-3)の肯定形⇒否定形の順序性は、ほぼ固定していると思われる。対比的な波形(図3)に類すると思われる。

以上見てきたように様々な文章の表現文型としての列挙・例示の例がある。それほど表現文型としての認知度は高くはないかもしれないが、以下のような表現パターンもある。紙幅の都合上、それらの表現文型と例文のみを示す。その他にも、抽出されなかった表現文型と例文については、別途検討したい。

#### 14. ～があり、～がある

例11-1) やはりそこには話術というものがあり、話し上手と話し下手がある。

(表現 p.11)

#### 15. ～(く) もなり、～(く) もなり

例15-1) 同じ内容の話でも、話し方の如何によって、おもしろくもなりつまらなくもなり、相手によく理解されもするし、理解されなくもなる。(表現 p.11)

## II. 符号等による列挙・例示の例

### 1. 中点（・）による場合

例1.1) 手紙や通知が特定の相手を対象にして書かれたり、一定の日時や場所の範囲で書かれたりするのに対して、説明・記録・報告では、そういう制約はあまり強くない。(表現 p.48)

例1.2) 旅行の時など、自分が泊まった一軒の旅館、自分の会った少数の人から、あの地方の人は「みんな」親切だとか、「みんな」不親切だとか言いがちだが、このような軽率な概括を避け、業種別・地域別・年齢別といった、各種のグループの代表的な事例から結論を出すようにしなければならない。(表現 p.87)

例1.3) 日本語の基本的な語順では、述語が文末に位置するので、話し手や書き手の肯定・否定・推量などの判断や意向は、文末まで来ないと聞き手や読み手に伝わらない。(表現 p.120)

中点（・）という符号の名称であるが、中黒、中黒点、黒丸、中黒丸、中ポツ、ポツ、中丸などという場合もある。武部（1987）によると中点（・）は「語を並べるときに間に用います」として「京都・大阪・神戸を見てきます」という用例を示している。

武部（1987）によると、複雑な場合は、小さい単位に「・」、大きい単位に「、」を用いるとしている。

人名の列挙の場合「徳永光展、グエン・クォン」のように、個人間の境目には「、」を用い、個人内の苗字と名前の区切りには、中点（・）を用いることが多い。その場合には、小さい単位に「・」、大きい単位に「、」と整理できる。ただし、その逆の例として「スルダノヴィッチ、イレーナ・ベケツシュ、アンドレア・仁科喜久子」のよう、個人間の境目には中点（・）を用い、個人内の苗字と名前の区切りには、「、」

を用いる例もある。日本語教育学会の『日本語教育』では後者の方式を用いている。

日本人同士の氏名の列挙には、「庵功雄，中西久実子，高梨信乃，山田敏弘」のようにコンマや句読点を用いる場合と「庵功雄・中西久実子・高梨信乃・山田敏弘」のように中点を用いる場合がある。

ちなみに日本語教育学会の『日本語教育』の参考文献の提示方式は、後者を採用しているが、論文の本文中では「庵・中西・高梨・山田（2001）」のようにフルネームではなく姓のみを列挙する場合と庵他（2001）や庵ら（2001）と筆頭者の姓のみを示し、共著者を列挙しない場合がある。論文中では、先行研究を橋本（2008）、砂川（2008）、仁科（2008）のように著者の姓と発表年を（ ）内に示して列挙する方式とまとめて（橋本2008，砂川2008，仁科2008）のように示す方式がある。参考文献リストは、左端に（1）（2）（3）…と通し番号を付けて示す方式と著者を五十音順に並べて示すために通し番号は不要とする方式があり、学会や論文集によって異なる。

外国人と日本人の名前の列挙の場合「大友賢二／ラドルフ・スッシャー」のように「／」で区切る場合もある。前節の「5. ～と～と～」のところで、“young and old”は「若いも若きも／若い者も年取った者も／老若男女」となると「または（or）」の意の区切りとして「／」の記号を用いた。

また、「テーブル・スピーチ」など外来語の区切りにも中点（・）を用いる。

さらに、列挙例示の例とは言えないが、年月日の言い表しに用いて「二・二六事件」のように表記される。ただし、算用数字になると2・26事件、2.26事件、226事件などのバリエーションがある。「3・11大震災」の場合も同様に「3.11」や「311」「3/11」など多様である。「3.11と9.11」などと災害や事件が列挙される場合もある。

## 2. 読点（、）による場合

例2.1) その主なものを数の多い順にあげると、スズガモ、オナガガモ、ウミネコ、シロチドリ、コアジサシ、ハシビロガモ、ヒヨドリ、イソシギ、アオサギ、ソリハシシギ、コチドリなどである。（表現 p.39）

例2.2) 私はこれまでも尾道、松江、我孫子、山科、奈良というふうに景色のいい所に住んできたが、ここの景色はなかでもいのように思う。（表現 p.104）

例2.3) 今は、通信・伝達の手段として、手紙、はがき、電話、電報、テレックスなど、いろいろなものがあるが、私たちの日常生活で、頻繁に用いられるものは、手紙、はがき、および電話であろう。（表現 p.122）

上記の例2.3の場合、「通信・伝達」と中点で結ばれた例と「手紙、はがき、電話、電報、

テレックス」と読点で列挙された例が同じ文の中に見られる。武部（1987）は、複雑な場合、小さい単位に「・」、大きい単位に「、」を用いるとしているが、上記の例2.3の場合は必ずしも単位の大小ではない。「通信・伝達」は、抽象的な語で両者の結束性が高いのに対して、「手紙、はがき、電話、電報、テレックスなど」はその具体例の列挙・例示であり、上位語と下位語の関係でもある。

前項の例1.1の「説明・記録・報告」も抽象的な語で意味的に関連性があり、結束性が高いと言える。例1.2の「業種別・地域別・年齢別」も例1.3の「肯定・否定・推量」も同様であり、メタ言語の列挙・例示と言えるだろう。それに対して、例2.1の「スズガモ、オナガガモ、ウミネコ…など」は具体的な鳥の名の列挙であり、例2.2の「尾道、松江、我孫子、山科…」も具体的な地名の列挙である。

加藤（1989）によると、「、」は、縦書きの文の中で、ことばの切れ続きを明らかにしないと、誤解される恐れのあるところに用いるとされている。また、公用文の横書きの場合は、「、」を用いず、「,」（コンマ）を用いることになっているが、一般にはまだ「、」を用いているものもあると加藤（1989）は指摘している。ちなみに日本語教育学会の『日本語教育』の論文投稿規定には、「、」を用いず、「,」を用いると定められている。

加藤（1989）によると、「、」は、読点としての用法以外に「対等の関係で並ぶ同じ種類の語句の間に用いる」として、「すべての項目、すべての用例について掲げた」という用例を挙げている。ただし、「項目」と「用例」が対等の関係かどうかは、疑わしい。この用例では、「すべての項目、すべての用例」の二項目だけであるが、上記例2.1～2.3のように三項目以上の列挙・例示に用いることができる。

### 3. 「 」による場合

例3.1) そのときは、「前略」「冠省」「前略ごめんください」などと略す。(表現 p.132)

例3.2) なお、前文から主文に移るときは改行し、「さて」「ついては」「ところで」「ときに」などの語を用いて文章を起す。(表現 p.132)

例3.3) 「拝啓」「謹啓」などに対しては「敬具」「敬白」、「前略」「冠省」などに対しては「草々」「不一」などが一般的な結語であるが、呼びかけなどの頭語に対しては「さようなら」「ごきげんよう」などを用いるのがふさわしい。(表現 .132-133)

例3.4) あて名に付ける敬称には「様」が一般的であるが、年少の相手、親しい相手には、「君」や「さん」も使われる。(表現 p.133)



「**┆**」は、角が直角の鉤状であることから「かぎかっこ」と呼ばれる。一重、二重の別があり、一重のものを「一重かぎ」「かぎ」「ひっかけ」、二重のものを「二重かぎ」と呼ぶ。(大類、2006参照)

論文・雑誌・新聞などの引用に「**┆**」を用いるため、引用符とも呼ばれる。参考文献の提示では、論文のタイトルを一重の「**┆**」で示し、書名や雑誌名・論文集のタイトルを二重の『**┆**』で示す。(例:権田直助著『国文句読法』の「総説」は、…)引用文中の「**┆**」は、『**┆**』で示される。

例3.1~3.4は、「手紙の形式」に関する相原林司氏の文章からの抜粋であるが、列挙・例示の語句が「**┆**」で表示されている。手紙文の文例を一般化して、その中から引用する形で「**┆**」を用いたとも言えるが、例3.3は「拝啓、謹啓などに対しては敬具、敬白、前略、冠省など…」と示してもよさそうである。しかし、相原氏としては「敬具」「敬白」、「前略」「冠省」のように「敬具」「敬白」と「前略」「冠省」の間に読点を置くことにより、両者のフォーマリティーの違いを表現したかったのであろう。それを「敬具、敬白、前略、冠省など…」とすべて読点で示すとその差異を示せなくなり、すべて対等の語の列挙・例示となってしまう。

対等の漢語の列挙・例示の場合、間に読点を置くことにより、列挙・例示としてふさわしい場合もあるが、例3.2の「さて」「ついては」「ところで」「ときに」などのように平仮名書きの語の列挙・例示の場合、「さて、ついては、ところで、ときになど」とすると、文章の中に溶け込んでしまい、どこからどこまでが列挙・例示なのか判別しにくくなってしまふであろう。例3.2の接続詞類に限らず、例3.3の「さようなら」「ごきげんよう」などの挨拶言葉の文例も同様である。

古典・古文の文章中には「**┆**」のような補助記号を用いておらず、引用のマークーとしては「と」、列挙・例示のマークーとしては「など」に頼るしかなかったのであろう。

「など」は、副助詞「なんど」の音変化したもので、名詞、活用語の連用形、一部の助詞などにつく。一例を挙げ、あるいは、いくつか並べたものを総括して示し、それに限らず、ほかにも同種のものがあるという意を表すとされる。(『デジタル大辞泉』参照)

例3.4の場合、「君」や「さん」と「**┆**」と「~や~」の組み合わせが用いられている。さらに文脈上は「様」と「君」や「さん」が列挙・例示されているのであるが、三者のフォーマリティーの違いを示すために例3.4のような書き方になったのであろう。この場合も「**┆**」で表示されていることにより、相互の語が離れていても列挙・例示されていることが了解できる。

#### 4. < >による場合

- 例4.1) 手紙は一般的な形としては<前文><主文><末文><あとづけ>の四つの部分から成るのが普通である。(表現 p.130)
- 例4.2) <原文>… <添削例①>… <添削例②>… (表現 p.114)

< >は、「山形」「山括弧」という名称もあるが、縦書きの場合は、確かに「山形」で始めるが、閉じる場合には、「谷形」となってしまう。横書きの場合は、「山形」にも「谷形」にも見えない。もともとは英語の文章中で用いられたため原語の「angle brackets」(角型括弧)がいいかもしれないが、他の括弧と区別するためには「三角括弧」という言い方がより適切だと思われる。

#### 5. 数字を用いる場合 (以下省略を…で示す)

- 例5-1) 第一は誠実さ 第二は明晰さ 第三はわかりやすさ (表現 p.13-16)
- 例5-2) (1) 思いつき (2) 裏付け (3) 訴え (表現 p.18)
- 例5-3) ①埋め立てによる人工なぎさの造成、エアレーション機能の保護  
②潮通しの確保、人工海と流動  
③酸素または空気注入等による水質浄化 (…) (表現 p.40)

数字の種類によって、I、II、III、IVなどのローマ数字を大分類、1、2、3、4などを中分類、(1)、(2)、(3)、(4)などを小分類、さらにその下位分類を①、②、③、④とする場合がある。数字でも順序を示さず「1. … 1. … 1. …」と列挙する場合もある。漢数字でも同様の例がある。

#### 6. カタカナなどの符号を用いる場合

- 例6-1 (ア) 人々の興味や関心の的となっていたり、共感を呼ぶことが予想されたりするものか。
- (イ) 誰もが解決の必要性を感じ、解決を迫られている問題で、それを解決することによって多くの人々に利益をもたらすようなものか。
- (ウ) だれにとっても基本的でありながら、しかも発展性があるものか。
- (…)(表現 p. 30)

例6-1は、「主題を決める」という文章中で、主題をしぼっていく際の留意点を箇条書きにしている例である。(ア)の例は、前節「1. ~たり~たり」が用いられている。

## 7. そのほかの記号・符号を用いる場合

例7-1 ○視力の弱い人がめがねをかける。  
○めがねのレンズは、ガラスやプラスチックである。  
○めがねは割れたり傷がついたりする。…（表現 p.28）

例7-1は、「めがね」という題が与えられたときに発散的思考をしようとして、取り出した考えを箇条書きに書き出したものである。発散的思考のためには、ただ書き出しただけではダメだとしている。

記号には、さまざまな種類があり、上記に示したものの以外にも多くの列挙・例示のしかたがあると思われる。記号と文字や絵を組み合わせた形で、マインド・マッピング（mind-mapping）による発散的思考を助ける列挙・例示のしかたもある。（石田1999、梶村2008、谷村2014、林2014参照）

（注1）牧野（1980）が、敬語がからむと、「と」と同じように、順序が固定することがあると言っているのは、「先生と私」のように目上の者を先に行かせる、先に座らせる、先に入らせるというのは日常生活にみられるほとんど普遍的な空間配置の順序が、ご順位にも表れるということである。

（注2）「虻蜂（あぶはち）取らず」と成句になった場合には、「二つのものを同時に取ろうとして両方とも得られないこと。欲を出しすぎると失敗することのたとえ」として用いられる。その場合は、「虻」⇒「蜂」という順序が固定する。

### 【参考文献】

庵功雄，高梨信乃，中西久実子，山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

庵功雄，中西久実子，高梨信乃，山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

池松孝子，奥田順子（1997）『「あいうえお」でひく日本語重要表現文型』専門教育出版

石田孝子（1999）「日本語教育におけるマインドマップの活用」山口県日本語教育ネットワーク発行『ボランティア日本語教師養成ハンドブック』、pp.45-55

石橋玲子（2007）『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』凡人社

- 大類雅敏 (2006) 『句読点活用辞典』 栄光出版社
- 岡本牧子、氏原庸子 (2012) 『くらべてわかる中級日本語表現文型ドリル』 Jリサーチ出版
- 加藤彰彦 (1989) 「第7章 文字・表記」『日本語概説』 おうふう、pp.244-245
- 相村知美 (2008) 「マインドマップを用いた作文指導—蘇州日本人学校中学3年生クラスでの実践実例—」 山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』 第31号、pp.84-100
- 武部良明 (1987) 『E 日本語の文字表記』 アルク (NAFL 日本語教師養成通信講座テキスト)
- 谷村諭思 (2014) 「マインドマップを用いた『偏愛マップ』作成の体験」 山口県教育カウンセラー協会発行『エンカウンター研究』 第7号、pp.101-108
- 林伸一 (1989) 「『～たり～たり』を考える」『月刊日本語』 1985年5月号、pp.67-69
- 林伸一 (2014) 「『省略する言語文化』と『明示する言語文化』—暗黙知、明示知、『見える化』についての考察—」 山口大学人文学部異文化交流研究施設発行『異文化研究』 vol.8、pp.1-13
- 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法—日・英語比較対照—』 大修館書店
- 馬淵和夫ほか (1982) 『高等学校 国語表現』 大修館書店
- 三上章 (1970) 『文法小論集』 くろしお出版
- 森田良行 (2010) 『日本語の慣用表現辞典』 東京堂出版
- 山口県日本語教育ネットワーク発行 (2009) 『おいでませ山口2』
- 山口県日本語教育ネットワーク発行 (2013) 『おいでませ山口3』
- 山口県日本語教育ネットワーク発行 (2015) 『おいでませ山口4』
- 『Weblio 類語辞典』 (<http://thesaurus.weblio.jp/content/>)
- 『デジタル大辞泉』 小学館 (2013)